

近代日本文学におけるイメージと文学のかかわりについての研究

A Study on relationship between image and text in Japanese modern literature

清水 沙也加¹, 林 恵美子¹, 若林 綾¹

¹大妻女子大学大学院人間文化研究科

Sayaka Shimizu¹, Emiko Hayashi¹, and Aya Wakabayashi¹

¹Department of Human Culture Graduate School of Otsuma Women's University

12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan 102-8357

キーワード：メディアミックス, 挿絵, 演劇

Key words : Media mix, Inserted within text, Drama

抄録

この研究の目的は、近代日本で文化的テキストが読者／オーディエンスによってどのように生産され、翻訳されていたかについて考察することである。とりわけ文化産業が発展した近現代では、文学テキストとメディアの関係はより錯綜し、多様な問題系を生み出している。文学テキストは、新聞や雑誌の記事の一つとして、美しくデザインされた本として、受け取られる。ときには、映画やマンガ、アニメーションに移植されることもある。そこに注目すると、文学テキストは、メディアや読者との協働を通じて、さまざまに変化していると言えるのだ。

私たちは、資本主義と文化との関わりに注目しながら、メディアの中で作り上げられたイメージが、文学作品の受容にどんな影響を与えるかを検討した。

1. 研究の目的

現在の日本近現代文学研究では、作品の内的な論理を精緻に分析していく従来の研究スタイルに加え、文学テキストの多様な流通と受容のあり方を視野に入れた、メディア論的な観点を踏まえた検討が積極的に進められている。だが、社会の中で物語が流通する際に、資本の利害や、受け手の側の欲望が、フィクションの流通と受容にどのように作用し、影響していくかという問題についての検討は、いまだに十分とは言えない状況である。

清水は、荒巻義雄『紺碧の艦隊』を取り上げ、書籍版とマンガ版について比較し、漫画と文学テキストから受けるイメージの相違を分析する。具体的には、1990年代以降の歴史認識をめぐる論争を踏まえ、より大衆的な媒体としてのマンガに文学テキストが変換される際、「歴史の描き方」にどのような差異が生じ、受け手に与える印象がどのように変化するかについて、具体的に検討する。

林は谷崎潤一郎『痴人の愛』を取り上げる。こ

の文学テキストの初出は『大阪朝日新聞』で、休載を経て同年11月から大正14年7月までプラトン社『女性』に掲載された。新聞連載小説に掲げられた挿絵画家田中良の挿絵が同時代のどのような文化的なコードに接続し、物語のイメージにどう作用したかについての考察を深めるとともに、1920年代の関西圏モダニズムを代表する雑誌といえる『女性』のメディア・イメージと『痴人の愛』の物語イメージとがいかに関係し、交錯したか検討する。

若林は、安部公房スタジオで上演された各文学テキストを対象に、原作となる小説テキストが存在するものについて、戯曲化の際にいかなる補訂・改訂が施されたかについて調査した。とりわけ、1973年に旗揚げされた安部公房スタジオにおいて、上演された作品の多くが安部の過去の文学テキストだったことに着目、小説と演劇とで異なるメディアの働き、そこに隠された戦略について明らかにする。

2. 成果報告

2-1.

文字テキストを原作とし、コミックや映像といった別媒体の作品を制作する、いわゆるメディア・ミックス作品は原作となる文学テキストが存在するとはいえ、原作とは別の作品であると考えることができる。

荒巻義雄『紺碧の艦隊』シリーズ及び『旭日の艦隊』シリーズは合わせて『艦隊』シリーズと呼ばれた、架空戦記というジャンルを確立した作品である。第一巻『紺碧の艦隊1-運命の開戦-』は徳間書店より1990年12月に発行され、2000年11月に中央公論新社より『新旭日の艦隊-大いなる地球-』が発行される長期シリーズであった。90年代に架空戦記作品は人気を呼び、多数の架空戦記作家が世に出ることとなったが、その中でも『艦隊』シリーズは1992年6月に徳間書店からコミック版が発行されたほか、ゲーム化、アニメーション化と複数の媒体でのメディア・ミックスが行われた。『艦隊』シリーズのアニメーション及びコミックでのメディア・ミックス作品に注目してみると、原作との差異という点から興味深いことがわかる。

奇抜な発想で書かれた荒唐無稽な文学テキストと捉えられがちな架空戦記作品だが、『艦隊』シリーズも例外ではない。それでも原作内には歴史上の出来事や分析や、日本の在り方への提言が織り込まれており、作品に寄せられた読者の声からも、奇抜な内容以外にも読者を引きつけている要素があることがわかる。しかし、アニメーション及びコミックの形態になった『艦隊』シリーズでは、登場する奇抜な作戦や架空の兵器類が前面に押し出されて描かれている。架空戦記作品のエンターテインメント性を決定づけているのが奇想作戦、奇想兵器であり、それらを魅力的に描いたアニメ版、コミック版『艦隊』シリーズは架空戦記ブームを加速させる一要因として機能したであろうが、同時に荒唐無稽とされる面を強調してしまい、架空戦記がエンターテインメント作品であるというイメージを決定づけてしまったのである。

しかし、『艦隊』シリーズのファン達が与えられるがままエンターテインメント面を享受し

ていたのかということ、前述の通り決してその限りではない。では原作の文学テキストからの提言を受け止める他に、読者と『艦隊』シリーズ原作、そしてメディア・ミックス版『艦隊』シリーズにはどのようなつながりがあり、どういったものが持ち込まれたのか。

ここで再び注目したいのが、原作の「後書き」である。シリーズ初期では作者からの「提言」がなされていたこのコーナーだが、シリーズが進むに従って、執筆にあたっての参考資料が提示されるようになる。その中で、読者からの資料の提供があったことがうかがえるような記述が登場しはじめるのだ。これは読者が『艦隊』シリーズを受けて資料の探索を行った、または所有していた資料、知識の開示を行い、それが作品にフィードバックされていたことを示している。

『艦隊』シリーズに限った話ではないが、アニメーションやサブカルチャーのファンの間では作品の舞台となったりモデルになった土地を実際に訪れたりすることがしばしば行われるが、その土地に作品の制作者からメッセージなどが寄せられることもあり、そちらを見ることがファンの目的になる場合もある。時にはモデルや舞台となった側が作品をアピールすることでその作品を呼び込む場合もある。目的が何であっても、モデルや舞台を実際に目にしに行けば、作品を経由しないモデルや舞台に関する情報を手に入れることとなる。そして手に入れられた情報は、作品のイメージ形成に利用されるのである。

メディア・ミックスが行われることで、作品のイメージの形成は作品そのもの以外の要因を持つことになる。そしてメディア・ミックス以外にもモデルや舞台や史実のデータなどが読者のイメージに働きかける。90年代のエンターテインメント小説、なかでも架空戦記作品は複数のイメージの形成元となるものが存在し、それらからの情報を読者が与えられたり、または自ら収集したりすることで複数の情報、そしてイメージが絡まり合い、干渉しあうことで読者それぞれのイメージが形成されていくのである。

複数の形成元によるイメージの形成が行われるのが、特定のジャンルの文字テキストにおける場合だけなのか、メディア・ミックス

が行われたり、モデルを持ったりすれば多くの文字テキストに起こりうる事象なのか、こういう事象は現代文学特有のものなのか、いつごろから発生しているのか、といった、主に範囲に関する課題は残る。それらを今後明らかにしていく必要があるだろう。

(文責：清水沙也加)

2-2.

谷崎潤一郎『痴人の愛』は、大正13年3月20日から同年6月14日まで『大阪朝日新聞』に掲載され、休載を経て、同年11月から大正14年7月までプラトン社『女性』に掲載された。

新聞連載では、洋画家田中良による挿絵が挿入された。田中は大正期の谷崎と同様、「西洋かぶれ」⁽¹⁾であり、女性のファッションや化粧、髪型に対する関心が高く、「明快かつ上品な味わいの画風で、都会やブルジョワジーの雰囲気を描きうる画家」⁽²⁾であったことから、『痴人の愛』の挿絵を描くにふさわしい挿絵画家として、期待をもって朝日新聞社や読者に迎えられたといえる。

そのため本研究においては、今まで論じられることのなかった新聞小説という発表形態に注目し、挿絵や記事、広告を含めた文学テキストとして『痴人の愛』を再考した。

新聞小説は他の記事と違って新聞社が小説家や挿絵画家などを決めることができるため、新聞社の意図や読者の希望、反応を取り入れやすいものであった。

『痴人の愛』の挿絵においては、「五尺二寸の小男」でさえない譲治がオールバックで整った目鼻立ち、蝶ネクタイとタキシードを身につけた紳士として描かれ、当時の新聞の主な読者層である新中間層男性及びそのあこがれの対象であるブルジョワジーを模した姿で固定化され、読者との同一化が図られている。ナオミもハリウッド女優のような顔、スタイルに一般の婦人に先駆けた「一風変わったスタイル」の魅力的な姿が文学テキスト以上のハイカラさで描かれている。

また、挿絵だけでなく映画記事「スクリーン」や女性をターゲットとする消費的／性的な広告とともに『痴人の愛』が見られることで、読者の欲望を内面化し、魅力的な「商品」としての質をもったかのようにみえた。しかし、

ナオミの「傲慢な、我が儘な根性」が「だんだん昂じて来」るのにあわせて性格や服装が我が儘に派手になったことで、読者の欲望以上にハイカラで性的になり、それが保守的な中高年読者層には新聞にふさわしくないと受け取られたようである。その結果、読者の批判を受け、新中間層へ向けた商品という点で一致していたはずの新聞社・谷崎・田中の意図にだんだんとズレが生じてゆく。そのズレが文学テキストと挿絵の間に葛藤を生み、終盤の「お伽噺の家」での熊谷と浜田のお泊まりや二度目の鎌倉旅行などで文学テキストに沿った、姦通を匂わすような挿絵を描くことが出来なくなってしまう。魅力的な「商品」であることを求めつつ、規範から逸脱することを許さない新聞社及び読者による圧力により、最終的には連載を中断せざるを得なくなってしまう。ここに新聞小説における読者の影響力の大きさ、「商品」としてのあり方がうかがえる。

中高年読者層には批判的に読まれていった『痴人の愛』も、青少男女間で「ナオミズム」という流行語がうまれることから、若い（とくに女性）読者に受け入れられ、評判を得ることとなる⁽³⁾。そのため、プラトン社『女性』への移行は、新中間層の女性読者にとって、よりふさわしい場への移動であったといえる。

(文責：林 恵美子)

2-3.

1970年代の安部公房は、小説家という一面を持つとともに、「安部公房スタジオ」を立ち上げ、演劇人としても名を馳せていた。「安部公房スタジオ」は、1973年『箱男』（新潮社 1973年）を刊行した直後に発足、仲代達也や田中邦衛等、後に名優と呼ばれる役者たちもメンバーとして名前を連ね、アメリカ公演まで行ったが、1979年に安部の体調不良が原因で、劇団は事実上、解散する。安部公房の演劇は、「演劇史」から、すっかり忘れ去られていったのだが、現在、少しずつ、安部の演出方法「安部システム」の解釈が、注目を集めはじめた。本研究では、安部公房が「安部システム」を用い、劇場でどのような効果を期待したのかということろまで、分析し、報告とす

る。

同時代評を見てみると、当時の「安部公房スタジオ」の評価はベストセラー作家となった安部公房の名に似合わず、手離しに歓迎されたわけではないらしい。「反射神経的な鋭さ、達者さはあっても、俳優の個人的な深部とどう切実に結びついているのかわからない演技が多いのである。新しい演技の創出をめざす安部システムの実践的効果は、長い目で見守る必要がありそうだ」⁽⁴⁾。内野によれば、同時代評から見た「安部公房スタジオ」は、「すでに正統となっていたアングラから評価されない」上、「瀕死の新劇からもきちんと評価」されなかった⁽⁵⁾。しかし、「安部システム」は、新劇の中で、アングラとはまた違う「異端」への期待を背負っていった。演劇の筋書きよりもむしろ、注目される「安部システム」とは一体、なんだったのか。

医学部出身である氏は、俳優の肉体をあくまでメカニズムとして捉えようとする。「一般の新劇の俳優が笑いの演技をしると言われると、すぐ笑う気持になろうとする。あれが第一にダメだ。医者のおぼくは、顔の笑いの筋肉の場所と、それが腹筋によって起ることを知っているからまず腹筋反射の訓練をさせるんだ」⁽⁶⁾。こうした演技法を安部は「ニュートラル」に近づくためだと言い、高橋は、これを「人間描写の可能性を極限まで突き詰めようとしたのではないか。そうすることで、安部演劇は、演劇というジャンルを超え、人間存在を問うという普遍的な問題にまで昇華した」ものだと解釈としている⁽⁷⁾。「人間存在を問う」ところまで行くかは不明だが、安部システムは俳優の精神的、または感情の模倣を嫌い、あくまで生理的な部分で俳優を、役柄ではない、役そのものにしようとしたと言えるのではないか。

寺山修司の天井桟敷しかり、唐十郎の紅テントしかり、アングラ派の劇団は、物理的に観客を巻き込むことで、客席と舞台上の距離を失くしてきた。しかし、安部の場合は、俳優をより「本物」にちかづけることで、観客と舞台上の距離とを縮めたと言えるだろう。

ぼくが芝居を書かずにいられないのは、現実を幕で仕切ることが、現実をゆがめることであるのと同様に、幕なしの現実が現実

の一面的認識に他ならないと思うからだ。ありのままの現実の、ありのままの表現など、言葉遊びにすぎまい。いずれ表現は、現実の歪曲なのだから、ぼくはあらゆる表現形式を使って現実挑戦してみたい。開かずの幕への挑戦が、小説という形式なら、もともと存在しない幕を開けてみせることが、ぼくにとっての芝居の意味なのである。⁽⁸⁾

俳優を多面的に見せることにより、観客を「一面的現実」へと落ち着かせずに、存在しない不可解な幕をいかにも現実のように見せる。そうした、「安部システム」とはアングラ派の演劇人とはまた違った意味での演劇と観客との接点を戦略的に見出そうとするものだったといえる。また、その戦略は小説よりずっと、空間的なメディアである演劇においてこそ、期待ができたものだろう。そしてその戦略の目的は、幕の無い現実をも、多面的に捉える観客の目を育てるためであったのではないか。それでこそ、「現実への挑戦」と言えるのではないか。

(文責：若林 綾)

3. 付記

本研究は大妻女子大学人間生活文化研究所「共同研究プロジェクト」(D015)の助成を受けたものである。また、学术交流の場として林は第17回谷崎潤一郎研究会で研究成果の一部を発表した。ここに深く感謝の意を表す。

4. 引用文献

- (1) 田中良『日本舞踊百姿』(別冊「幕間帳」, 講談社, 1974年7月, 32~33頁)
- (2) 渡辺圭二『『生ける人間』を描く』(『名作挿絵全集』3巻, 平凡社, 1980年10月, 119頁)
- (3) 橋爪健「ナオミズム」(『読売新聞』1925年10月3日朝刊), 「閑談」(『読売新聞』1925年10月24日朝刊)
- (4) 「愛の眼鏡は色ガラス」劇評「意欲的だが成功せず」(『朝日新聞』1973年6月16日夕刊)
- (5) 内野儀「新劇とアングラのあいだ一演劇的異端としての安部公房」(『ユリイカ』1994年8月26巻8月号) 212~221頁
- (6) 「低迷する現代日本文学を語る」(『毎日デイリーニュース』1973年1月26日)

(7) 高橋信良『安部公房の演劇』(水声社, 2004年4月) 6頁

(8) 安部公房「後記—『戯曲 友達・榎本武揚』」(河合出書房社版, 1967年11月30日) 221頁

— Abstract —

This study is aimed to consider how cultural texts in modern Japan were created and adapted by readers/audiences. Within developed cultural industries in particular, readers never encounter literary texts without mediation. Rather, they encounter them in newspapers or magazines, or as beautifully designed books, or perhaps as illustrated (manga), animated (anime), or film adaptations.

In this sense, literary texts are always transformed through their relationship with readers and media.

This research project, which pays particular attention to the connection between capitalism and culture, examines how the reception of literary works is influenced by images created in the media.

(受付日 : 2013年12月31日, 受理日 : 2014年4月25日)

清水 沙也加 (しみず さやか)

現職 : 大妻女子大学大学院人間文化研究科言語文化学専攻修士課程

青山学院大学文学部日本文学科卒業.

専門は近・現代日本文学. 現在は太平洋戦争を題材としたエンターテインメント作品を題材に, 戦争表象が, 現代の戦争認識形成に与えた影響を研究している.